

# 真宗學

第 136 號

---

「行ずることなほかたし」考

.....玉 木 興 慈

道綽『安樂集』「勸信求往」の構造について

.....福 井 順 忍

鉄条網のなかの浄土真宗

——日系アメリカ人強制収容所における仏教伝道——

.....釋 氏 真 澄

傾聴と聴聞と

～公開講座のアンケート調査から～

.....早 島 理

---

平成 29 年 3 月

龍谷大學 真宗學會

目次

「行ずることもなほかたし」考	……………	玉木興慈(一)
道綽『安樂集』「勸信求往」の構造について	……………	福井順忍(二)
真宗学会第七十回大会研究発表要旨	……………	(三)
平成二十八年真宗学講義題目	……………	(四)
平成二十七年度真宗学修士論文・卒業論文題目一覧	……………	(五)
編集後記	……………	(六)
鉄条網のなかの浄土真宗		
——日系アメリカ人強制収容所における仏教伝道——	……………	釋氏真澄(27)
傾聴と聴聞と		
く公開講座のアンケート調査からく	……………	早島理(1)

## 真宗学会第七十回大会研究発表要旨

### 「信文類」における「与諸如来等」 「便同弥勒」説示の一背景

龍谷大学大学院 博士後期課程 日 下 貴 行

「信文類」便同弥勒の説示背景に関しては従来、親鸞が中国宋代浄土教諸師の思想を受容することで当時の聖道諸師の興隆に対応する意味のあったことが指摘されている。しかし、親鸞説示が宋代浄土教との如何なる関係を孕みながら聖道諸師に対応し得るものであるのか、詳細は未だ明らかではない。以降、先行研究で指摘される親鸞説示、宋代浄土教、聖道諸師の相互関係を基調としながら、その内実にせまることで一視点を提示したい。

先ず「便同弥勒」の語は直接的には宋代の浄土居士王日休に依る。そして便同弥勒の構成を見れば、用欽や宗暁といった宋代浄土教諸師の文献を引証することで、その説示が確かめられていく。また引文配置にも注目できよう。「教行信証」にて何か一つの事柄を確かめる際、通常「大経」の説示を冒頭に置

き、続いて他の経論釈で「大経」の意を確かめる形をとるが、ここでは王日休引文を「大経」と「如来会」によって引証する形をとっており、他には見ることでできない配置となっている。つまり、「信文類」の「便同弥勒」説示は、宋代浄土教との関係において初めて根拠づけられるものであるといえる。

宋代浄土教とは、確立した宗として存在したものではなく、諸宗融合の様相を見せるが、従来諸宗にわたる底流として流れるのが、唯心浄土・自性弥陀思想であるとされる。その唯心浄土・自性弥陀思想を主流とする宋代浄土教にあつて、指方立相的な浄土観を持ちながら称名念仏と懺悔を中心とする浄土往生行を実践したのが、宋代の浄土居士王日休である。王日休はその主著「龍舒浄土文」の中で、自らを含めた人間の機根を問題としながら、当時の参禅者に対し、「泥<sub>ニ</sub>唯心之説<sub>コ</sub>」（『浄土全』六、八四一）として批判を呈す。このことは親鸞が「信文類」序にて「近世宗師沈自性唯心貶浄土真証」（『真蹟集成』一、一五七）と述べ、近世宗師の自性唯心的浄土理解を課題とするのと符合する。親鸞が「近世」と呼ぶ当時の浄土教理解は自性唯心的なものであったといえる。例えば明恵は「摧邪輪」にて、菩提心の成熟過程においての所変とする浄土往生理解を背景として、その現実性を問題に指方立相を説く法然に対し厳しい批

判を展開するのである。結論を先に述べれば、これら自性唯心の浄土理解より為される批判に対応しうるのが、「信文類」にて展開される「与諸如来等」「便同弥勒」説示といえるのである。

「与諸如来等」「便同弥勒」についてふれる多くの述作の中、親鸞が「信文類」でのみ、「如来と等し」「弥勒と同じ」とされる者が他者へと弥陀法を凶らずも弘通していく利益を明示することは先に論じたが(拙稿「便同弥勒」「諸仏等同」思想の研究)(龍谷大学大学院文学研究科紀要「三六」、今回さらに国宝本「浄土和讃」の一首、「歡喜信心無疑者おぼ 与諸如来等」とく 大信心は仏性なり 仏性すなわち如来なり)(聖典全書「二・上、三八五)の依拠となる「信文類」三一問答・涅槃経「獅子吼菩薩品」引文を見ると、坂東本では

以<sub>レ</sub>信心故以<sub>レ</sub>菩薩摩訶薩則能具<sub>ニ</sub>足<sub>一</sub>檀波羅蜜乃至般若波羅蜜一切衆生畢定當得<sub>ニ</sub>大信心<sub>一</sub>故是故説言<sub>ニ</sub>一切衆生悉有<sub>レ</sub>仏性大信心者即是<sub>レ</sub>仏性仏性者即是<sub>レ</sub>如来(真蹟集成「一、二〇六)

と示されるものが、専修寺本では、  
以<sub>レ</sub>信心故菩薩摩訶薩則能具<sub>ニ</sub>足<sub>一</sub>檀波羅蜜乃至般若波羅蜜一切衆生畢定當得<sub>ニ</sub>大信心<sub>一</sub>故是故説言<sub>ニ</sub>一切衆生悉有<sub>レ</sub>仏性大信心者即是<sub>レ</sub>仏性仏性者即是<sub>レ</sub>如来(専修寺本教行信証「上、二二九)

となつてゐる。坂東本では、**以**は○印によつて挿入指示され、

この加筆にともない網掛け部「当」の訓が「当<sub>ニ</sub>得<sub>レ</sub>ベキヤ」に訂正される。また、**以**の挿入箇所にも注目できよう。これにより挿入直後にある菩薩が波羅蜜を具足することと、衆生が大信心を得ることとの関係性がより明確になる。坂東本はこれらの加筆訂正により、如来↓菩薩↓衆生という法の伝達される過程をより明確に示すのである。

専修寺本は、親鸞八十三歳時の坂東本の状態を知れる資料であり、親鸞は八十三歳以降に坂東本に対し加筆訂正を行っていることになる。つまり専修寺本と坂東本との差からは、「如来と等し」い者を通じて衆生にまで如来の心が現実的に至る様を、晩年になって尚「信文類」でのみ明確に示そうとする親鸞の意図をうかがうことができよう。

明恵に代表される聖道諸師が、指方立相を標榜する法然浄土教に対し問題とするのは、弥陀浄土の現実性であるといえる。「信文類」便同弥勒釈は、指方立相の浄土往生を勧める宋代浄土教の諸文を引証として展開されるが、親鸞の説示は決して指方立相にとどまるものではなく、弥陀法がさらに現実的にはたらく様を示すものであつた。また、親鸞が八十三歳以降の晩年になつて尚、これらの意義を「信文類」でのみ、より明確にするため加筆訂正を行うことは、その説示背景として、近世宗師の自性唯心的浄土理解より為される、法然浄土教に対する論難に対応し、また超克すべき意義があつたことを指摘しておきたい。

# 親鸞の法然觀をめぐる一考察

龍谷大学大学院 渥美 光

はじめに

『親鸞は『尊号真像銘文』(一二五五・一二五八)において、自身の師である法然のことを「信心をえたるひと」・「信心のひと」として語っている。また正嘉元年(一二五七)十月以降には、親鸞と門弟との間で「信心よるこぶひと」を「如来とひとし」・「弥勒におなじ」とする書簡のやりとりがあったと考えられている。そして『尊号真像銘文』は、その書簡がやりとりされた頃と同時期の史料にあたる。しかし、これまで親鸞の「信心のひと」として語られる法然觀については関心が持たれてこなかった。そこで本稿は、『尊号真像銘文』を中心に「信心のひと」として語られる親鸞の法然觀について、その特徴を考察したい。

なお『尊号真像銘文』には親鸞真筆のものが二点伝来しており、それぞれが製作された年の年号から、建長本(一二二五)・正嘉本(一二五八)と一般的に呼び分けられる。以下本稿でも、この名称を用い、両者を含む場合には『尊号真像銘文』と表記する。

一、「信心のひと」として語られる法然について  
まず、親鸞が法然のことを「信心のひと」として語っていたことについて確認したい。

『尊号真像銘文』には、隆寛が法然のことを讃嘆した文について、親鸞の解説が加えられた箇所がある。そしてその箇所には、「仏光円頂」のことを弥陀光によって「信心のひと」が照らされることであるととして釈されている(『聖典全書』二、六三八―六三九頁)。

「仏光円頂」とは、各種法然伝に法然の奇瑞として描かれた「頭光踏蓮」のことを意味していると考えられている。そしてこの「頭光踏蓮」のことは、親鸞真筆のものが伝来する『西方指南鈔』所収『源空上人私日記』の中に見られる。また「高僧和讃」「源空讃」の中にも、「頭光踏蓮」のことが詠まれている。したがって、親鸞と門弟との間で、法然の奇瑞である「頭光踏蓮」のことは周知の理解であったと考えられる。

このような親鸞とその周辺の理解からすれば、親鸞は『尊号真像銘文』によって、法然のことを弥陀光に照らされる「信心のひと」として門弟に語っていたと言えるだろう。

## 二、親鸞の勢至菩薩觀について

親鸞の「信心のひと」として語られる法然觀は、彼の勢至菩薩觀にも垣間見える。

親鸞が法然のことを勢至菩薩の化身として理解していたこと

は、『浄土和讃』『勢至讚』などに確認される。そしてその勢至菩薩を讃嘆する文として、正嘉本には『首楞嚴経』『勢至獲念仏円通の文』が置かれている。

この「勢至獲念仏円通の文」には、勢至菩薩が因地修行において無生法忍を得たことが記されているが、正嘉本において親鸞は、「無生忍」の箇所「フタイノクラキナリ」との左訓を付すことで、勢至菩薩が因地修行によって不退の位に就いたとして解釈している(『聖典全書』二、六一四頁、上段)。

このように、法然の本地として理解される勢至菩薩についても、法然と同じ「信心のひと」として親鸞は語っていたと言えるだろう。

### 三、勢至菩薩の弥陀法相承について

親鸞が法然および勢至菩薩のことを「信心のひと」として語った『尊号真像銘文』は、真仏を中心とする高田門弟に伝持されている。また、正嘉元年十月に親鸞から真仏へと宛てられた書簡には、「信心よろこぶひと」が「如来とひとし」である証文として第十七願文および願成就文を挙げている(『聖典全書』二、七八四頁)。

この真仏宛書簡では、元来、阿弥陀仏の名号や威神功德不可思議のはたらきが諸仏によって讃嘆称揚される意であるところの第十七願成就文を、「信心よろこぶひと」が諸仏によって讃嘆される意として親鸞は用いているが、これには彼の勢至菩薩観が関係するものと考えられる。なぜなら、先に確認した勢至

菩薩の因位修行について記す「勢至獲念仏円通の文」には、阿弥陀仏から勢至菩薩への法の相承について明かされており(大正一九、一二八頁、上段)、親鸞もその描写を依用しているからである(『勢至讚』・『正像末和讃』・正嘉本)。

なお、このように弥陀法の相承者として描かれる勢至菩薩は、親鸞が『高僧和讃』『源空讚』に詠むような弥陀法を弘めるヒトとして語られる法然観にも重なると言えるよう。

#### むすびにかえて

以上、親鸞の「信心のひと」として語られる法然観について考察してきた。

「信心のひと」として語られる親鸞の法然観は、正嘉本における彼の勢至菩薩観にも垣間見え、そこに用いられた「勢至獲念仏円通の文」には弥陀法の相承者としての勢至菩薩が描かれている。そしてそれは、真仏宛書簡に記された、「信心よろこぶひと」が諸仏によって讃嘆されるという第十七願成就文の親鸞理解と重なる。

したがって本稿では、親鸞の「信心のひと」として語られる法然観の特徴を、弥陀法の相承者であることを意味していたと結論付けておきたい。

(今回は紙数の都合上、詳細な点は省略する。)

「死にゆく過程を生きる物語を  
どういただく、どう伝えるか」

田畑 正久

医療と仏教は同じ生老病死の四苦に取り組みながら、日本の医療現場では協力関係が実現していません。約30年前、仏教を背景とした「ビハラー運動」が始まりましたが、医療界のビハラー運動への認識は低い。医療関係者の教育は科学的合理思考でなされており、健康の状態に戻す「治療」という発想が主で、老病死の受容の考えはない。加齢現象や疾病で食べることでなくなつた患者へ、経管栄養が実施され、生かされている患者は四十万人と言われます。

医療文化には、死の受容の発想がありません。東北大学で臨床宗教師の講座を創るのに貢献した岡部 健医師は、自身が胃癌になり、治療不可能な状態になった時、「死に往く者の道しるべを失つた日本の文化に驚いた」と言われています。

「死」をどう受け止めて「生きるか」が医学界で問題とされるようになりました。二〇一〇年の医学界新聞に「第八回英国緩和ケア関連学会報告」として「緩和ケアをすべての疾患に拡大する、医療における第三のパラダイムシフト」と題する記事で、特記すべき話題は「Good Deathを包括した公衆衛生的ア

プローチ」です。今までの医療が「死んでしまえばお終い」という死を拒否する姿勢から、『よい死』を包括した医療へ」という方向転換をする動きが出てきた、ということです。

高齢社会を迎え、否応なく直面する「老病死をどう生きるか」が課題になって、「死を包括した医療」は「医療と仏教の協働」が展開する機運の時代性を感じます。「死」への「生」だけでは魅力のある社会になりそうに思えません。ポーヴォーブルは「老い」の著書で「人間がその最後の十五年ないし二十年の間、もはや一個の廃品でしかないという事実は、我々の文明の挫折をはっきりと示している」と言っています。

医学は身体や病気のカラクリを解明して、Evidence Based Medicine (EBM)、根拠に基づいた医療)として、不確実性の多い医療の中で、確かな治療法の確立に貢献してきました。しかし、意識や精神を持つ人間を全人的に把握できないことに気づき、EBMを補完するものとして Narrative Based Medicine (NBM、物語に基づく医療)が提唱されました。人生観、生死観を尊重する医療です。同じような全人的対応の発想が、Human Based Medicine (HBM)と名付け、「一人ひとりの、その人なりの幸せ」をめざす医療や、Whole Person Care (WPC)と言われる考えもできています。「単に病気を診断し治療を行うだけではなく、治療困難な病気とともに生きる人々に寄り添い、癒し人となる医療者を育てる」ことを実践しています。

仏教は三世の救いを教え、浄土への「生」を説く浄土教は無

条件の救いを実現します。智慧によって「人間として生れた意味」、「生きる物語」、「死んで往くことの物語」に気づき、老・病・死を往生浄土の歩みとして受け取るように導かれます。

人間の思考を計算的思考と全体的(根源的)思考に分けることができます。医療人は科学的合理思考、即ち計算的思考で訓練されて専門の知識は豊富ですが、局所的であるという弱点を持っています。宗教的な思考は全体的思考であり、「ものの言う声を聞く」、「この現実には私になにを教えようとしているのか」というように思考します。

智慧によって科学的思考の狭く、狭く、局所的で迷いを繰り返していることを気付かされます。そして智慧の「人間とは」「人生とは」の全体像を見透かした内容に触れる時、仏の教えのごとく念仏して生きていこうと導かれるでしょう。

虚無主義、快樂主義と個人主義が複雑に絡み合って形成されている人生観は「私の人生は死んだら終わり。だから、生きていくうちに、楽しいこと、心地よいことをするしかない。私が幸せになることが、人生の目的である。」となるでしょう。それに唯物的な科学的思考が、追い打ちをかけて「生きることに意味」は見い出すことはできません。

浄土の教えは、空過流転ではなく実りある人生を、生ききる道を教えています。臨床の現場で老病死に直面して患者から発せられる、いわゆるスピリチュアル・ペインは、「無条件の救い」を説く本願の教えで救われる道が示されています。治療不可能な「病」、生理的加齢現象の「老・死」に対して、現代医

療は命の長さにとらわれた救命、延命対応がなされ、かえって生命の質を低下させることになっています。

患者に寄り添い、関係者の協議を重ね、〇〇〇を高める援助に努めることが願われます。生死勤苦の本を抜く智慧の視点がある時、全ての状況の患者への対応ができる広がりを持てるでしょう。

死に日常的に接する医療関係者は「死」に対して個人的心情から自分の生死観を患者に適應するのではなく患者が死をどのように受け取っているかと患者に寄り添い、「死」をめぐる文化の蓄積に関心を持つてもらいたい。仏教が「人生を全体的に考える」という面では深く、大きな視点を持つていることに驚かされます。

医療者は患者の医学的全身管理を学び、経験を重ねる中で、いつの間にか人間の全身管理をすることができるといふ傲慢さに陥りやすいが、それは医学的管理であって、人間の全体像が分かった事ではないと謙虚であるべきです。

仏の智慧に触れて、自分の相(すがた)を知らされ、智慧の洞察力に驚きを持つて目覚める者は、精一杯、未練なく生きることができ、自然と死を超えて仏へおまかせの世界が広がるでしょう。「必ず浄土に生まれて、また会える世界がある」往生浄土の教えは、豊かな味わいの死後観を教えてください。



# 平成二十八年年度真宗学講義題目

## 文学研究科真宗学専攻

### ○浄土教理史演習

『教行証文類』の研究(統講)

川添 泰信

### ○真宗教学史演習

「明和の法論」の基礎的研究

龍溪 章雄

### ○真宗伝道学演習

真宗伝道の基礎的研究

深川 宣暢

### ○真宗学演習

親鸞思想における真実の救済観の解明

鍋島 直樹

### ○真宗学演習

『教行証文類』の基礎的研究

那須 英勝

### ○真宗学特殊研究

A 善導大師研究―観想念仏から称名念仏へ― 森田 眞円

B 善導大師研究―観想念仏から称名念仏へ― 森田 眞円

A 親鸞思想への比較宗教論的アプローチ 那須 英勝

B 親鸞撰述にみる三経観―「文類」を中心に― 殿内 恒

### ○真宗教学史特殊研究

A 真宗本尊論研究史の再検討 龍溪 章雄

B 真宗本尊論研究史の再検討(続) 龍溪 章雄

### ○浄土教理史特殊研究

A 『法然聖人御説法事』の研究

藤堂 俊英

B 『選擇本願念佛集』の研究

藤堂 俊英

### ○真宗学文献研究

A 歎異抄を読む I

藤 能成

B 歎異抄を読む II

藤 能成

A 法然教学の伝承

普賢 保之

B 法然教学の伝承

普賢 保之

A 「化身土文類」の読解(統講)

殿内 恒

― 聖道仏教の位置づけ―

殿内 恒

B 「化身土文類」の読解

殿内 恒

― 聖道釈・外教釈の意義―

殿内 恒

A 浄土真宗の安心論題と異安心史の研究(上) 武田 晋

B 浄土真宗の安心論題と異安心史の研究(下) 武田 晋

A 英文浄土教文献研究(クリティカル・リーディング)

グランバック リサ アン

B 英文浄土教文献研究(ライティング)

グランバック リサ アン

### 実践真宗学研究科

#### 《基礎研究科目》

#### ○実践真宗学総合演習Ⅰ(ア)

実践真宗学の分野と方法

殿内 恒・田畑正久・早島 理・貴島信行・葛野洋明

○実践真宗学総合演習Ⅱ（ア）

実践真宗学の分野と方法

殿内 恒・田畑正久・早島 理・貴島信行・葛野洋明

○実践真宗学研究

実践真宗学の基本的理解

深川 宣暢

○真宗教義学研究

真宗教義の基本的理解

川添 泰信

○現代宗教論研究

宗教多元の研究―宗教間対話、宗教の教学―

高田 信良

○大乘仏教論研究

大乘思想の展開

能仁 正顕

○浄土教思想論研究

浄土教思想の基礎的研究

武田 晋

○現代社会論研究

現代社会と宗教

猪瀬 優理

○宗教心理学研究

宗教心理の探究と浄土教

岩田 文昭

○宗教教育学研究

子どもの育ちと宗教性

田岡由美子

○仏教伝道史研究

近代的仏教伝道の歴史とその課題

中西 直樹

○真宗伝道史研究

浄土真宗と伝道

龍溪 章雄

○真宗教団論研究

真宗教団の存在意義

○倫理学研究

生命と環境の哲学倫理学

丸山 徳次

○外国語文献研究

英文真宗文献研究（リーディング・ライティング）

グランバック リサ アン

《専門（宗教実践）》

○真宗人間論研究

真宗における「人間」理解

深川 宣暢

○布教伝道論研究

真宗伝道における基礎的研究と実践

貴島 信行

○組織活動論研究

寺院活動の基本

宗本 昌延

○メディア伝道論研究

伝道のための情報発信の具体的技術を学ぶ

和田 眞雄

○宗教儀礼論研究

宗教儀礼の諸相と意義

小野 真龍

○地域・寺院活動論研究

地域の特性を活かした寺院活動を考える

窪田 和美

○宗教法人運営論研究

I 現代社会における宗教法人運営の実践的研究

山口 卓

II 寺院の適正なる管理運営について

林 春男

○宗教実践特殊研究

A 実践基盤としての宗教性―真宗の立場― 殿内 恒

B 浄土真宗寺院の実践運動を学ぶ 武田 晋

C 仏教教団の近代化と社会事業 中西 直樹

D 浄土真宗は、現代において何をなし得るか？ 藤 能成

E 表現スキルの獲得 仲山 豊秋

○宗教実践演習 I

親鸞教義に基づく社会実践の可能性 鍋島 直樹

真宗伝道の基礎的研究と実践 貴島 信行

国内外の布教伝道の実践的側面に関する課題とその研究 葛野 洋明

○宗教実践演習 II

真宗伝道につながる親鸞の死生観と人間観の研究 鍋島 直樹

法座伝道における実践方法 貴島 信行

国内外の布教伝道の実践的側面を通した、各自の宗教実践 葛野 洋明

的課題の研究 葛野 洋明

○宗教実践演習

真宗伝道の実際 杉岡 孝紀

真宗における布教伝道と寺院活動 貴島 信行

宗教的実践課題のもと、実習計画に則した実習 葛野 洋明

○宗教実践演習 III

真宗伝道の実践的研究 杉岡 孝紀

浄土真宗における宗教実践の課題と方途 貴島 信行

国内外の宗教実践の課題を通した研究の結実 葛野 洋明

○国際伝道論研究 国際化・グローバル化する現代における伝道論の研究 葛野 洋明

―理論と方法―

○臨床宗教師総合演習

Clinical Training for Spiritual Care and Religious Care 鍋島 直樹

○臨床宗教師実習

Clinical Training for Spiritual Care and Religious Care 鍋島 直樹

○生命倫理論研究

生命倫理・倫理・宗教 早島 理

○人権・平和論研究

仏教における人権論と平和論 高田 文英

○ビハラー・スピリチュアルケア論研究

ビハラー活動・臨床宗教師の理念と実際 鍋島 直樹

○カウンセリング論研究

宗教とカウンセリング援助技術 友久 久雄

○臨床心理学研究

臨床心理学の理解と実践上の基本問題 森田 喜治

○精神保健学研究

精神保健学研究

精神保健学研究

精神保健学研究

精神保健学研究

精神保健学研究

精神障がいとその予防、および治療・援助 吉川 悟

○ボランティア・NPO活動論研究

ボランティアとNPOと宗教 深尾 昌峰

○グリーンフケア論研究

宗教的実践者としてのグリーンフケア 黒川雅代子

○社会実践特殊研究

A 生老病死と先端医療（終末期医療、移植医療） 早島 理

B 仏教カウンセリングと超高齢多死社会 吾勝 常行

C 諸問題を抱える宗教法人の社会実践研究 山口 卓

D 現代社会にあふれる「苦」に対応する寺院・僧侶の実践活動 高橋 卓志

E 寺院の現状把握と特に報恩講について

○社会実践演習I

生命倫理・倫理・宗教 早島 理

医療と仏教の協働 田畑 正久

○社会実践演習II

生老病死と終末期医療 早島 理

医療と仏教の協働 田畑 正久

○社会実践演習

学外実習の基礎 早島 理

○社会実践演習III

実習に向けての検討・討議 田畑 正久

○社会実践演習III

修士論文及び報告書の作成 早島 理

修士論文及び報告書の作成

○仏教社会福祉論研究

仏教社会福祉とはなにか 長上 深雪

○矯正保護論研究

刑事施設における犯罪者の社会復帰

宗教に何が期待されているか？ できるだけのか？ 石塚 伸一

そして、宗教に何が

《諸課程科目》

○真宗教団活動論

布教使資格取得に関する諸講義 季平 博昭

文学部真宗学科

○真宗学概論

A1 真宗教義の基本的理解 川添 泰信

A2 真宗教義の基本的理解 川添 泰信

B1 真宗を学問として学ぶ 玉木 興慈

B2 真宗を学問として学ぶ 玉木 興慈

○浄土教理史

A 浄土仏教の起源と浄土経典の成立 深川 宣暢

B 浄土教の展開 深川 宣暢

○真宗教学史

A 親鸞思想（真宗教義）解釈史の概説（中世・近世） 龍溪 章雄

B 親鸞思想（真宗教義） 解釈史の概説（近世・近代・現代）  
龍溪 章雄

○浄土教聖典学概論

A 浄土教聖典の成立と展開  
河智 義邦

B 浄土教聖典の成立と展開  
河智 義邦

○真宗聖典学概論

A 親鸞の説き示した教え  
貫名 讓

B 親鸞と覚如・蓮如の説き示した教え  
貫名 讓

○浄土教概論

A 日本浄土教の学ぶ  
武田 晋

B 法然門下の浄土教  
武田 晋

○真宗伝道学

A 浄土真宗は、現代人の苦悩や問いにどう応えるのか？  
藤 能成

B 現代と宗教  
打本 弘祐

○比較思想論

A 親鸞思想への比較思想的アプローチ  
那須 英勝

B 親鸞思想への比較思想的アプローチ  
那須 英勝

○教理史特殊講義

A 1 韓国仏教と新羅浄土教  
藤 能成

A 2 『讀阿弥陀佛偈』並びに『略論安楽浄土義』と曇鸞の思想  
溪 英俊

B 1 真宗上三祖の教義と親鸞の受用  
桑原 昭信

B 2 真宗上三祖の教義と親鸞の受用  
桑原 昭信

○教学史特殊講義

A 1 近代の真宗思想入門  
岩田 真美

A 2 近代の真宗思想入門  
岩田 真美

B 1 真宗本尊の本義を探る—真宗本尊論をめぐる諸問題—  
龍溪 章雄

B 2 真宗本尊の本義を探る—真宗本尊論をめぐる諸問題—  
龍溪 章雄

○（統）

○教義学特殊講義

A 1 親鸞の救済観—生きる意味の探究  
鍋島 直樹

A 2 親鸞の死生観—悲しみを希望にかえるもの  
鍋島 直樹

B 1 真宗教義の体系的解説  
佐々木義英

B 2 真宗教義の体系的解説  
佐々木義英

C 1 親鸞が語る「願生往生」の原理—「無生の生」ということ  
渡邊 了生

C 2 親鸞が語る「願生往生」の原理—「無生の生」ということ  
渡邊 了生

○伝道学特殊講義

A 1 医療と仏教が協働することがどうしたらできるか（前期）  
田畑 正久

A 2 医療と仏教が協働することがどうしたらできるか（後期）  
田畑 正久

B 1 浄土真宗の教えを生きる—教えと現実を繋ぐ（I）—  
藤 能成

B 2 浄土真宗の教えを生きる―教えと現実を繋ぐ(II)―

北岑 大至

C 1 終末期医療と宗教―スピリチュアルケアを学ぶ―

打本 弘祐

C 2 グリーフケアを学ぶ

打本 弘祐

。教理史講読

A 1 浄土三部経を読む1

真名子晃征

A 2 浄土三部経を読む2

真名子晃征

B 1 『往生論註』を読む

山崎 真純

B 2 『往生論註』を読む

山崎 真純

C 1 『往生論註』を読む

岡崎 秀麿

C 2 『往生論註』を読む

岡崎 秀麿

。教学史講読

A 1 覚如の教学

三浦 真証

A 2 蓮如の教学

三浦 真証

B 1 『御伝鈔』の講読

野世 英水

B 2 『御文章』の講読

野世 英水

。教義学講読

A 1 「正信偈」を読む1

四夷 法顕

A 2 「正信偈」を読む2

四夷 法顕

B 1 『教行証文類』「教巻・行巻・信巻」の講読

川添 泰信

B 2 『教行証文類』「証巻・真仏土巻・化身土巻」の講読

川添 泰信

C 1 『尊号真像銘文』を読む

栗原 直子

C 2 『尊号真像銘文』を読む

栗原 直子

D 1 親鸞以降の消息の読解

安藤 章仁

D 2 親鸞以降の消息の読解

安藤 章仁

E 1 真宗学の世界

高田 文英

E 2 真宗学の世界

高田 文英

。伝道学講読

A 1 妙好人の言葉を読む1

小池 秀章

A 2 妙好人の言葉を読む2

小池 秀章

B 1 蓮如上人御文章の講読

打本 未来

B 2 蓮如上人御一代記聞書の講読

打本 未来

C 1 宗教的環境・感性の分析と評価

寺本 知正

C 2 宗教的環境・感性の分析と評価

寺本 知正

。真宗学基礎演習 I A (真宗入門)

殿内 恒・佐々木大悟・打本弘祐・能美潤史・武田 晋

。真宗学基礎演習 I B (真宗入門)

殿内 恒・佐々木大悟・打本弘祐・能美潤史・武田 晋

。真宗学基礎演習 II A (「教理史」「教義学」を中心に学ぶ)

佐々木大悟・井上善幸・打本弘祐・能美潤史・岩田真美

。真宗学基礎演習 II B

佐々木大悟・井上善幸・打本弘祐・能美潤史・岩田真美

。教理史演習

I A 逆観の浄土教理史―親鸞から望む浄土教の伝承―

深川 宣暢

I B 逆観の浄土教理史―親鸞から望む浄土教の伝承

(中国浄土教から原始浄土教へ)―

深川 宣暢

I A 法然聖人の浄土教を学ぶ①

武田 晋

I B 法然聖人の浄土教を学ぶ②

武田 晋

II A 親鸞思想と現代世界―真実の探求

鍋島 直樹

II B 親鸞思想と現代世界―真実の探求

鍋島 直樹

II A 『無量寿経』と真宗文献

佐々木大悟

II B 『無量寿経』と真宗文献

佐々木大悟

。教学史演習

I A 覚如教学の特色―『改邪鈔』を中心に― 殿内 恒

I B 覚如教学の特色―『改邪鈔』を中心に― 殿内 恒

I A 蓮如の教学と伝道の姿勢を言行録から学ぶ

能美 潤史

I B 蓮如の教学と伝道の姿勢を言行録から学ぶ

能美 潤史

II A 真宗学全般に関する知識の習得と整理

II B 真宗学全般に関する知識の習得と整理

II A 真宗教学の諸問題

II B 真宗教学の諸問題

。教義学演習

I A 親鸞における信心の思想

I B 親鸞における信心の思想

I A 三帖和讃を読む

I B 三帖和讃を読む

I A 浄土を考える

I B 浄土を考える

II A 真宗思想に関連する諸問題

II B 真宗思想に関連する諸問題

II A 真宗学の問題

II B 真宗学の問題

II A 親鸞教義の普遍性と特殊性

II B 親鸞教義の普遍性と特殊性

。伝道学演習

I A 真宗伝道の課題と展望

I B 真宗伝道の課題と展望

I A 教学と伝道

I B 教学と伝道

II A 真宗伝道の基礎的研究

II B 真宗伝道の基礎的研究

II A 浄土真宗の現代的可能性

II B 浄土真宗の現代的可能性 II

。卒業論文

親鸞思想と現代世界―真実の探求

浄土教・真宗思想に関連する諸問題

各自が問題意識を持ち、それを明らかにするために調査と

思索の成果を「卒業論文」にまとめる。

真宗教学の諸問題

玉木 興慈

杉岡 孝紀

杉岡 孝紀

殿内 恒

殿内 恒

高田 文英

高田 文英

那須 英勝

那須 英勝

那須 英勝

那須 英勝

那須 英勝

井上 善幸

井上 善幸

川添 泰信

川添 泰信

藤 能成

藤 能成

那須 英勝

鍋島 直樹

佐々木大悟

井上 見淳

井上 見淳

岩田 真美

真宗思想に關連する諸問題

殿内 恒

真宗学の諸問題

高田 文英

親鸞思想の普遍性と特殊性

那須 英勝

真宗伝道の基礎的研究

川添 泰信

現代社会と浄土真宗

藤 能成・那須英勝

○ 布教伝道論

I 浄土真宗における布教伝道の理論と実際

貴島 信行

II 浄土真宗における布教伝道の教学的基礎と実践的側面に

ついての考察

葛野 洋明

○ 文書伝道論

I 文書伝道の現状と実践

西 義人

II 文書伝道の基礎と実践

八橋 大輔

○ 真宗教団史

真宗教団の形成と展開

高田 未明



# 平成二十七年度 真宗学修士論文・卒業論文題目一覧

論文題目	姓名	実践真宗学修士論文	姓名
大学院修士論文			
真宗における英語翻訳の研究	高 宣也	「実践真宗学」の意義とその方法論	入江 衆
— 鈴木大拙英訳を中心に —		真宗における寺院伝道	巖 教亞
親鸞の言語観	松谷 慧光	寺院活動の研究	岩崎 教大
— 『六要鈔』を中心に —		— 宗教の公益性の視点から —	
存覚教学の研究	岩田 光	真宗保育の実践に関する研究	織田 心海
— 『六要鈔』を中心に —		現代における真宗伝道方法論の一考察	小原 顕真
親鸞における利他の研究	近藤 義行	— 寺院活動としての文書伝道論 —	
浄土真宗における生きる意味についての研究	新道 岳章	自死問題における僧侶の役割	木下 祥悟
— 恥の根源性としての慚愧の考察を通して —		— 自死遺族支援を中心に —	
近世中期真宗の民衆教化に関する一考察	鷲見 燈璃	現代における真宗葬儀のあり方	黒瀬 英世
— 菅原智洞を中心に —		浄土真宗の念仏者における対人支援の研究	佐々木了慈
親鸞の来迎思想研究	田中 好三	— よりそのの再考 —	
真宗儀礼論の研究	林 龍樹	寺院活性化についての一考察	佐藤 信広
真宗学における哲学的研究の一断面	藤井 大慎	— 青少年教化の可能性 —	
— 武内義範と星野元豊 —		寺報における真宗伝道の研究	小岱 紫朗
善導の人間観の研究	藤雄 正受	現代における信仰共同体の課題と展望	角 慧願
大谷光瑞の研究	水内 大悟	現代における寺檀関係の研究	戸田 栄信
親鸞における仏性義の研究	那須野 浄彰	— 真宗伝道の視点から —	
		浄土真宗の教義とビハラ僧としての社会的役割	中村 長二

緩和ケアにおける宗教者の役割

— スピリチュアルケアを中心に —

西脇 大成

浄土真宗とグリーフケア

「タノムタスケタマヘ」の考察

古峨 光至

現代における看取りの研究

— 親鸞の現生正定聚観をもとに —

野村 大慈

三業惑乱と真宗の主体性について  
蓮如の和歌における研究

小山 勝大

現代における真宗伝道のあり方

— 念仏サンガの可能性 —

藤實 乗教

「タスケタマヘ」の一考察  
現代社会における真宗僧侶の役割

藤永 淳真

プロジェクトダーナの研究

— 寺院における社会的実践の可能性 —

山本 一成

蓮如教学の研究  
現代社会と仏教

三上 淳教

真宗における念仏道場の成立と寺院伝道

— 真宗の現在位置 —

水口 照道

親鸞思想における行と信の關係  
浄土真宗における念仏者の人間像

水之江唯顕  
守屋 一樹

文学部真宗学科卒業論文

真宗教義をめぐる現代人の理解とその問題点

真宗における女人往生の一考察

現代社会の孤独感と浄土真宗の救い

妙好人の信心と念仏

— 浅原才市・近重善太郎・椋田與市を通して —

金安 真弥

親鸞の人間観  
— 悪人の救いについて —

齊藤万里絵

木下 阿子

蓮如の伝道と正信偈

近代浄土真宗教団の海外開教

— アジア地域におけるその影響 —

寺本 世存

親鸞における人生観の一考察  
真宗におけるグリーフケアの実践

池田 拓朗

現代社会における視聴覚伝道の展望

善鸞義絶事件についての一考察

仏教の女性観

真宗における仏教音楽の必要性

真宗と葬送儀礼

長尾 証二

— 自己受容の観点から —  
親鸞と習俗・俗信

池田 聡

石田 萌

藤安 依子

真宗においての善知識の意義  
親鸞教学形成における法然教学の影響  
戦時下における教団と教学

石司翔太郎

伊東 英明

宮井 慧

岡本 章吾

尾山 正見

元浄 教真

稲垣 りこ

稲木 義成

井上 慶淳

井上 大乗

— 十五年戦争期における浄土真宗を中心に —

仏教・浄土教の死生観

親鸞聖人の生涯と悪人正機説

人間が抱える悩みと求められる救い

『歎異抄』の教学史的意義

浄土真宗におけるグリーンフケア

真宗の救済論

善導の教人信の実践

—善導の民衆教化の実態と後世に与えた影響—

蓮如上人の教団形成

親鸞の信の成立について

真宗の日常性に関する一考察

無宗教時代の浄土真宗

—『歎異抄』を中心として考える—

現代社会における浄土真宗の意義

親鸞における往生成仏の一考察

現代葬儀の課題と可能性

—社会の変化と人々の意識の変化から見る—

親鸞における『正像末和讃』成立の意味

法然門下における生因願の一考察

現代の日本人の信仰する宗教

石山合戦時代の真宗教学

親鸞と蓮如の行信思想

真宗とカウンセリング

阿弥陀仏の救いの対象

今尾 亮

今田 真史

今福 良介

岩田 幸

上田 泰地

上ノ坊千穂

上原 広大

梅田 萌

江尻 慶之

海老海明純

大城 綾香

太田かおる

大西 佑貴

沖田 大号

奥田 章吾

尾寺 陽海

勝水 崇眞

桂 誓至

加藤 祐賢

河上 秀朗

紀伊登本翔

浄土真宗における念仏者の生き方

ハワイ開教の歴史と展開

—現代の日本にどう活かすか—

現代における浄土の意味と真宗教義的意義

現生正定聚の研究

今、求められる真宗僧侶とは

—門徒事情を踏まえて—

宗祖における称名の意義

現代のいのちの問題

—親鸞の死生観の視点より—

金子みすゞと浄土真宗

アメリカ仏教における伝道活動の歴史と現状

表現文化と仏教・真宗の思想

近代浄土真宗の考察

—廃仏毀釈をめぐって—

真宗における比喩の一考察

仏教と保育

現代社会における僧侶と寺院の可能性

現代人の宗教観から見る浄土教の意義

本願寺教団と社会福祉

—真宗における現状の課題と可能性—

真宗の救済論における二種深信の意義

真宗カウンセリングについて

親鸞における往生の一考察

北本 一樹

木本 晃英

教山 了悟

楠 應知

窪田 滋弘

熊鷹 信行

桑原伸之介

小池 俊信

小阪 蓮

木場 大介

是川 和子

後藤 智久

鷲森 優見

佐々木朋信

柴田 章徳

清水 教信

釋 智志

季平 潔哲

管 顕照

仏教と医療

―「老病死」の捉え方の違いについて―

法然と親鸞の菩提心理解について

如来の本願とそれはたらしきの中で生きる親鸞

親鸞・蓮如の伝道と現代の都市開教

宗教の存在意義と現代におけるあるべき姿

―浄土真宗とキリスト教の比較から見て―

親鸞における悪人救済の一考察

安楽死と浄土真宗についての考察

浄土真宗の可能性

―その伝道学的考察―

真宗における阿弥陀仏観の一考察

現代における親鸞の住生思想の意義

現代社会における真宗および宗教のあり方

浄土真宗と近江商人の精神基盤

浄土真宗における空思想の展開

蓮如上人の教学

親鸞浄土教における信の一考察

蓮如の女人往生観について

真宗における往生観の一考察

真宗における釈迦・弥陀の関係性の一考察

真宗における悪人救済の思想について

三願転入と往生観

親鸞と法然の出遇い

隅谷 彩加

親鸞における三願転入の一考察

原田 真哉

須山希有子

現代人と浄土真宗

委文 祐磨

高橋 英昭

隠れ念仏について

廣川 真依

龍山 崇道

真宗における信心と利益について

深見 慧隆

建部 真道

真宗の女性観

藤井 淳平

田中 翔

道綽における親鸞思想への影響

藤井里紗子

谷口 貴康

親鸞浄土教と空海密教の比較的一考察

藤岡 融也

徴 弘昭

親鸞における浄土真宗の完全性の一考察

藤川 進平

薩摩の念仏信仰

真宗伝道における仏教讃歌の役割

藤園 拓哉

―かくれ念仏の背景―

浄土真宗の念仏信仰

藤谷 蓮子

常盤井光志

日本浄土教における阿弥陀仏観の一考察

藤本 浩紀

豊田 賢人

現代に宗教は必要か

本田 悠真

中川健太郎

―現代社会と浄土真宗―

正木 頭樹

中島 千尋

真宗における音楽伝道の可能性

増井 智子

那須 弘頭

親鸞の悪人正機

松井 良太

夏間 惠龍

親鸞の浄土観

松島 祐樹

西脇 順照

親鸞における曇鸞教学影響の一考察

松永 大右

野川 大真

宮沢賢治と浄土真宗

松永 夕月

橋本 暢

「伝道」をめぐる仏教とキリスト教の比較

松林 大地

橋本 裕紀

―理念・方法を中心に―

三浦 敬雅

柱松 泰史

未来をひらく伝道

三浦 敬雅

原 大真

―親鸞・蓮如・沼田恵範に学ぶ―

三浦 敬雅

原田 聡

現代における浄土真宗の必要性

三浦 敬雅

グリーフケアについて

水谷美由紀

— 看護師、葬儀社などの立場から出来ること —

「おもてなし」の心から見る宗教

三野 彩美

浄土教における信の研究

源 智道

浄土真宗と人権

三好 真理

今村恵猛と初期ハワイ開教

村上 響

現代の日本人の苦悩と浄土真宗の救い

安井 菫貴

浄土真宗における信と念仏

柳井 報生

歎異抄における親鸞聖人の思想について

藪谷 麻由

学校教育における宗教教育の必要性

山岸 敬

妙好人から見る真宗的人間像

山下 顕

中世社会と真宗教団の関わり

山田 智敬

— 蓮如の王法為本をめぐって —

歎異抄から見る親鸞の人間観

好井 正智

— わたしの救い・悪人の救い —

『執持鈔』の教学史的考察

脇坂 優太

J O D O S H I N S H U I N N E P A L

ギシン

ウマ ラマ

真宗における「真俗二諦」論の教学史的展開

秦 永真

編 集 後 記

『真宗学』第一三六号をお届けいたしました。今号には、短期大学部教授の玉木興慈先生、実践真宗学研究科教授の早島理先生の論文をはじめ、本学大学院生の福井順忍氏ならびに釋氏真澄氏の投稿論文を掲載させていただきます。

玉木先生は、「浄土和讃」の中に見られる「信ズルコトモナホカタシ」と「行ズルコトモナホカタシ」との異同に着目し、とりわけ、「行ズルコトモナホカタシ」とは、「利他をする」という獲信者の行について「難」と示されていることを指摘しております。

早島先生は、「傾聴」と「聴聞」ということについて、公開講座におけるアンケート結果を手がかりとしながら、傾聴活動が煩惱の拡大再生産に終始してしまうのではなく、傾聴を行う者も傾聴を希望する者も共に、煩惱の縮小再生産の道を歩むことこそ重要であると述べておられます。

福井氏は、『安樂集』の「勸信求往」の語に着目し、特に第一大門は「往生の過程が示されたもの」として解釈できることを述べ、従来より未整理部分などが指摘される本書について、実際には従来の評価に比べ、より論理的に記されたものであることを指摘しております。

釋氏は、日系アメリカ人強制収容所において行われた仏教伝道を中心に取り上げ、多くの苦難に直面した日系人や日系二世の人々の間でどのように浄土真宗が伝えられていったのかを、「アメリカ化」をキーワードとして述べておられます。

今年度は、研究発表大会が七十回目を数える節目の年でありました。先人から続く学問研鑽の歩みを継承し、今後ますます真宗学会が発展していくことを念じます。論文をご寄稿下さった四先生には、厚く御礼申し上げます。

(能美)

平成二十九年三月十日印刷  
平成二十九年三月十五日発行

編集者 真宗学会  
編集委員

(禁 転 載)  
発行者 川添泰信  
真宗学会長

印刷所 (株) 図書同朋舎  
印刷

〒105-8566  
京都市下京区七条大宮  
発行所 龍谷大学真宗学会

電話 (代) 075-343-3323番  
振替 02600-618746番

取次店 永田文昌堂  
京都市下京区花屋町通西洞院西入  
振替 02020-41936番

## CONTENTS

- A Study of the Phrase “More Difficult Still to Practice”  
(Gyozurukotomonaho katashi) .....Kōji Tamaki ( 1 )
- On the Structure of “quanxin qiawang” in the Daochuo’s Anleji  
.....Jyunnin Fukui ( 24 )
- Jodo Shinshu Behind Barbed Wire: Buddhist propagation  
at the Internment Camps of Japanese Americans  
.....Masami Kikuchi ( 27 )
- A Study of Listening closely and Hearing the Dharma  
.....Osamu Hayashima ( 1 )

# SHINSHUGAKU

JOURNAL  
OF  
SHIN BUDDHIST STUDIES

Nos. 136

March 2017

---

---

---

---

SHINSHU GAKKAI

Research Association of Shin Buddhist Studies

**Ryukoku University**

Shichijo Omiya, Shimogyo-ku

**Kyoto, Japan**